

京都大学の 学術情報基盤の未来を考える

■ 展 示 会 ■

「知識を運ぶメディア」

平成17年11月15日(火)～12月18日(日)

午前9時30分～午後5時

会 場 1：京都大学百周年時計台記念館企画展示室
「京都大学の学術情報散見」

会 場 2：京都大学附属図書館3階展示室
「京都大学電子図書館とハイブリッド展示」

京都大学附属図書館では、毎年秋季に公開展示会を行ってきておりますが、今年は、年度当初に「京都大学図書館機構」が発足したことを記念して、図書館機構の公開事業として位置づけ、展示会と講演会と討論会を開催することとしました。

図書館機構として初めて実施する公開事業のテーマは、「京都大学の学術情報基盤の未来を考える」です。学術情報（図書や雑誌）の電子化が急速に進み、ネットワーク化によってキャンパス内であれば研究室に居ながら電子化された学術情報を24時間読むことができる学術情報基盤の整備が進む中、京都大学の基盤整備を今後どのように進めれば良いかを考えてみようという試みです。

京都大学図書館機構が、初めて開催する公開事業です。どうぞたくさんの皆様に参加いただき、これを契機として、京都大学の学術情報を知っていただくと共に、学術情報基盤の未来を見据えて、整備を進める力としていただければ幸いです。

公開展示会はテーマを「知識を運ぶメディア」とし、二つの会場で以下の主題別に展示しています。

〔百周年時計台記念館〕

- ① 知識を運ぶメディア：羊皮紙、百万塔陀羅尼經、甲骨文字等
- ② 所蔵本で見る学術情報の発生：世界最初の学術雑誌、Natureなどの創刊号、貴重な図書等
- ③ 我が国最初の航空写真（昭和2年秋）で京都の町を見る：京大北部及び京都駅の変遷
- ④ 我が国における学術雑誌創刊号：西洋雑誌、東京數學會社雑誌、日本地震学会等
- ⑤ 京都大学の最初の刊行物：第三高等学校一覧、京都帝國大學医科大学紀要、Saiensu等

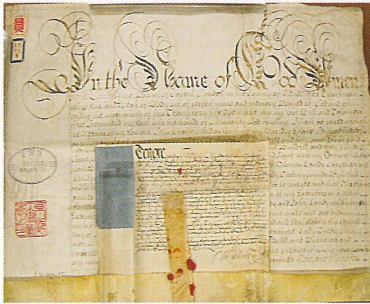
〔附属図書館〕

- ⑥ 京都大学電子図書館と貴重資料のハイブリッド展示。
貴重図書（国宝「今昔物語集」等）と電子版の同時展示

平成17年11月15日 京都大学図書館機構長 大西 有三

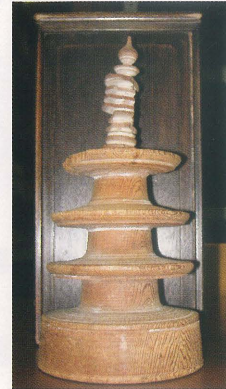
会場1：百周年時計台記念館企画展示室

1. 知識を運ぶメディア：印刷以前のメディアと写本



① 羊皮紙古文書 (Pergamentum, Parchment)

ヨーロッパではエジプト時代から書写材料にPapyrus (パピルス) を使用したが、前2世紀小アジアのPergamon王 Eumenes IIが古代東方の皮紙製造を復活し、書写材料に加えた。王の名をとり、Pergamon と呼ぶ。(英語のParchmentはこの語の変化したもの)
この文書は18世紀の遺言状である。



② 百万塔陀羅尼経 神護景雲四年(770)

我が国最古の印刷物といわれている。天平宝字八年(764)称徳天皇の発願によって作られたもので、木製小型供養塔百万基の中に、塔毎に陀羅尼一卷を納めたものである。神護景雲四年(770)に完成し、東大寺などの諸大寺に分け納められた。所蔵のものは根本陀羅尼経。



③ 錫蘭文古貝多羅経 (せいろんぶんこばいたらきょう)

古来印度では、多羅樹の葉を書写の材料として用いており、これを貝多羅(Patra)と云う。多羅樹の葉を乾して一定の形に切り、小切または錐に似た道具で字形を作り、その溝へ墨をうずめて文字を表し、一片の両面に書写する。若干の片を重ねた一部の各片の両端に二つの孔をあけ、紐を通して束ねる。梵夾と称する上下2枚の木版で挟み書冊の形とする。

④ 甲骨文字「殷代卜骨」(人文科学研究所)

中国殷時代後期(紀元前1300年ころ～1000年ころ)の、占い吉凶を占う。占いの記録が当時の文字で刻まれていて、これを卜辞という。この卜骨上の筆跡は、歴組一組という種類に属するので、殷後期のなかでも比較的初期のものであることがわかる。卜辞の内容は、農作物のために雨の降ることを願って、数日にわたり繰り返し占ったものである。



⑤ 清原家家学書「塵芥」(重要文化財)

清原宣賢撰・自筆[室町後期]写

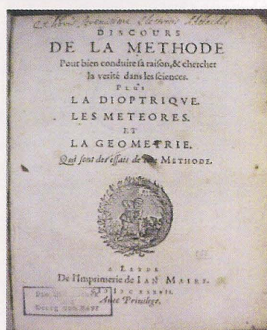
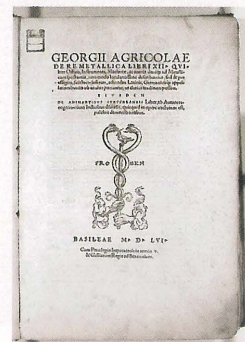
清原宣賢による作詩・作文のために編纂された辞書で著者自筆稿本。いろは四十四部に分類した後、天地、時節、人倫、気形等の十一部門に分けたもの。韻書、類書、古典注釈書などの諸要素を一書に合わせもたせている。

2. 所蔵本で見る学術情報の発生：雑誌の創刊号と初版本

① De re metallica / Georgi Agricolae (1556)

(理学研究科・地質学鉱物学教室図書室)

Agricola (George Bauer, 1494–1555)が近世初頭に中世以来の鉱山・鉱物についての知識をまとめたもので、名著として長く読まれた。本書は1556年スイスのバーゼルで出版されたラテン語の初版。内容もさることながら、多数のさし絵は当時の鉱山業のありさまをよくあらわしており、美術的にもすぐれていて、ゲーテが賞賛したことでも有名。



② Discours de la methode pour bien conduire sa raison / Descartes Leiden (1637) (経済学部図書室)

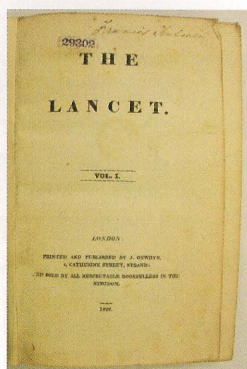
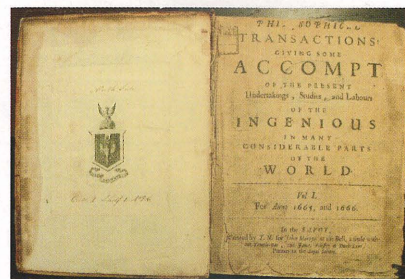
デカルト(1596–1650)「方法叙説」初版本。

我が国での所蔵は少なく、きわめて稀観なものといわれている。オランダのライデンで1637年に刊行されたが、当時、学問的書物がラテン語を国際共通語としていた中であって、フランス語で書かれた。近代哲学の出発点のひとつとされる著作。

③ Philosophical Transactions of the Royal Society of London Vol.1 no.1 (1665)

(理学研究科・地質学鉱物学教室図書室)

ロンドンの王立協会の機関誌で、科学に関する定期刊行物としては世界最初のものといわれる。創刊号を展示。



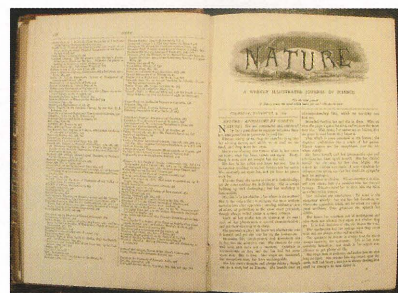
④ The Lancet Vol.1 No.1 (1823) (医学図書館)

世界で最も権威があり歴史のある総合医学雑誌の一つである。1823年にThomas Wakleyによりロンドンで創刊されてから、200年近い歴史がある。創刊号を展示。

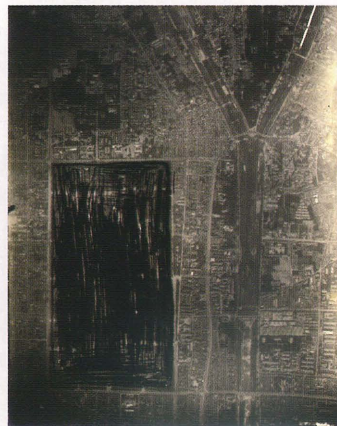
⑤ Nature Vol.1 No.1 (1869)

(理学研究科・地質学鉱物学教室図書室)

自然科学分野の進歩をタイムリーに科学者達に伝える目的で発行された週刊科学誌であり、136年間変わらず科学を広く包含する雑誌である。創刊号を展示。



3. 我が国最初の航空写真(昭和2年秋)で京都の町を見る



昭和2年撮影の航空写真

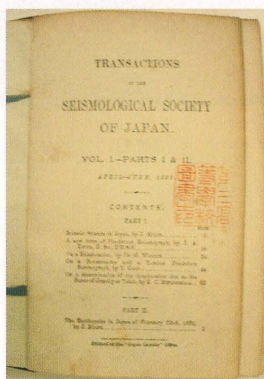
昭和2(1927)年に撮影した航空写真(空中写真)が、京都大学理学部地質学鉱物学教室の図書室にある、写真はモノクロ八つ切りサイズ(21.6cm×17cm)で、84枚が残る。撮影されている範囲は京都盆地で、北は深泥池から南は千拓前の巨椋池まで、東西は東山から嵐山の山麓までである。

我が国に航空写真が広く普及したのは、昭和22年から23年にかけて米軍が全国を撮影してからである。一般には我が国最初とされる米軍撮影の航空写真よりさらに20年も遡る日本における最初期の貴重な航空写真が、一部分がセピア色に変色しているこの写真である。

黒く塗りつぶされた御所

昭和2年の写真の中で、京都御所(御苑)は黒くペンで塗りつぶされている。時代背景を映す写真である。最も新しい航空写真(平成16年6月撮影)には本年4月に開館された京都迎賓館が明瞭に写っている。(理学研究科・地質学鉱物学教室図書室)

4. 我が国における学術雑誌創刊号

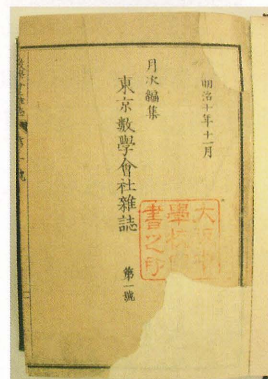


① Transactions of the Seismological Society of Japan (1880) (人環・総人図書館)

日本地震学会(The Seismological Society of Japan)の創刊した季刊の雑誌。同会の規約には、「地震や火山に関わる現象を全て対象とし、事実を蒐集して研究を発展させるためにこの学会を設立した」と書かれている。同会は、東京大学理学部機械学科のユーイング教授、物理学のグレー教授、工部大学校鉱山学のミルン教授たちが提唱して、明治13(1880)年3月に設立され、会長には、服部一三(東京大学法理文学部副総理)が選任され、副会長にはミルン教授が就任した。会員は117名、そのうち80人は外国人であった。会員には、アーネストサトウの名もある。

② 東京数學會社雑誌(1877-1884) (人環・総人図書館)

明治10(1877)年11月に東京で創刊された数学雑誌。創刊号の表紙には月次編集とある。官僚で、啓蒙思想家でもあった神田孝平が東京数学会社の初代社長になり、数学関係書籍の収集・翻訳・刊行など社会に数学を広めていくことを同社の設立の目的とした。継続後誌の「日本数学会誌」に、ノーベル物理学賞受賞者で本学名誉教授である湯川秀樹博士の「素粒子の相互作用について」という中間子理論が英文で発表された。昭和9(1934)年11月17日、東京帝国大学での研究講演で発表した内容で、昭和10年2月に掲載されたのであるが、これがノーベル物理学賞の対象となった論文である。





③ 泰西名医彙講 (たいせいめいいこう) (1836-1841) (附図 富士川本/タ/25)

19世紀初頭に長崎から入ってきたオランダの医学書の中から、箕作阮甫(みつくりげんぽ)が医学者たちの論説を翻訳し集めて紹介したものが「泰西名医彙講」である。天保七(1836)年に巻一が出され、年に1冊刊行され、関係者に配付されてきたもの。巻七(三輯巻一)は天保13(1842)年に出ている。今日の医学雑誌のはしりと言って良いもの。

④ 西洋雑誌 (1867) (文学研究科図書館)

やがて「中外新聞」を創始する洋学者柳河春三が、オランダの雑誌に掲載されていた記事を邦訳して月に1回刊行した雑誌で、我が国で最初の雑誌と言われるもの。我が国が条約を結んだ国11カ国の国王(大統領)などの系譜が載せられているほか、巻1には、「国を富ませるに先ず學術を開くべきの論」が掲載され、巻4には、「褒功私説」としてパテント(「特許」という訳語はまだ宛てられていない)という語が、巻5には、ジブラルタル海峡に建立されている来倫波(コロンブス)の像と碑文が紹介されている。



⑤ 農業雑誌 (1876) (農学部図書室)

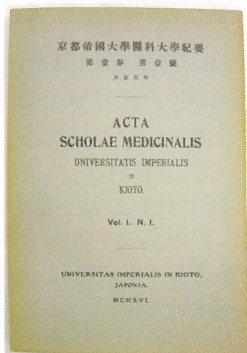
農作物や農具が彫刻された表紙には毎月2号出版と印されている。創刊号の内容は、「農業雑誌編輯大意」(津田仙=編集長)、「媒助法の細説」(十文字信介=編集者)、「麦苗轉壓車を用いる事並びに図」(仁木政佑)、「馬糞瀝(ホットベツ)の用法及び装置法」(堤幹巳)である。奥付には、定価として毎号5〜6銭、一年分一円二十五銭とある。毎号、巻末には売捌所として、取扱書店の一覧が出ている。初号は東京麻布と銀座二社の計3社であったものが4号になると計35社となり、京都では西京寺町通姉小路上の丸屋善吉の名前が見える。6号には青森まで43社が名前を連ねており、取扱業者の全国的な広がりが見て取れる。

5. 京都大学の最初の刊行物・学術雑誌創刊号

① 京都法学会雑誌 (1906) (附図 BNC/ホ/10K)

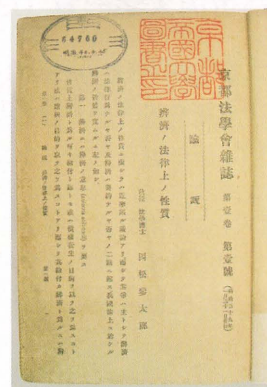
明治39(1906)年に、法科大学(現法学部)の機関誌として「京都法学会雑誌」が創刊された。「発刊ノ辞」には、明治34年に在学生・卒業生の懇親と學術を深めるため設置された政法協会が、京都法学会へと名称を変更することを目的に機関誌「京都法学会雑誌」を創刊したと記されている。

「京都法学会雑誌」は大正8(1919)年に「法学論叢」に改称し、現在に至っている。



② Acta scholae medicinalis universitatis imperialis in Kioto 京都帝國大學医科大学紀要 (1916) (附図 BNC/A/40)

京都帝国大学医科大学は明治32(1899)年に創立された。医科大学における欧文紀要の創刊号は大正5(1916)年3月28日に発刊されている。

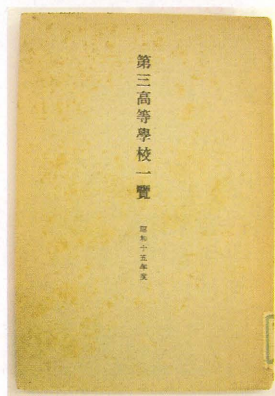
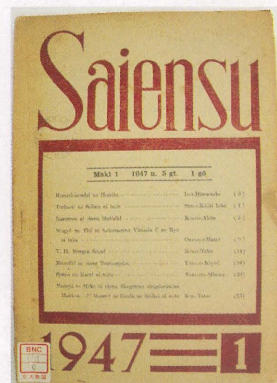


③ Saiensu (1947) (附図 BNC/WS/0)

昭和22(1947)年5月1日、戦後日本の学術を再建するために、京都大学の教員有志が刊行した学術雑誌。「Saiensuを出すについて」という一文には「“Saiensu”は、その形式においても、その内容においても、もっとも自由な、そして進歩的な学術雑誌を標榜したいとおもいます」とあり、「おもいつきですべてローマ字書きを採用することにした」と書かれている。

この主旨に賛同した教員は、湯川秀樹(物理学)、泉井久之助(言語学)や穴戸圭一(化学)など17名。編集の世話役として、梅棹忠夫(京大理学部)ら7名。創刊号には、泉井久之助「ローマ字問題の本質」、穴戸圭一他「トリモチの成分」、小堀憲「函数論における不等式」など8本の報告が収録されている。

この雑誌は、編集者の「3号雑誌で終わることなく」という宣言にも拘わらず、第3号(昭和22年12月)で終刊したようである。



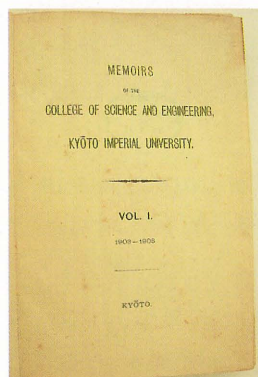
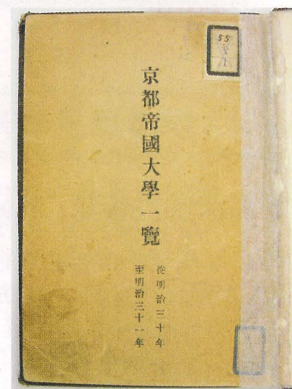
④ 第三高等学校一覧 (1896-1897) (附図 1-52/タ/10)

旧制の大学・高等学校・専門学校などの高等教育機関の多くは、原則として毎年度各学校の「一覧」を発行していた。そこには、学校の沿革・規則・職員名簿・在学者氏名・卒業生氏名・建物配置図などが収録されていた。展示している「第三高等学校一覧」は附属図書館所蔵で最も古いもの。

ノーベル賞を受賞した湯川秀樹と朝永振一郎は、京都府立京都第一中学校・第三高等学校・京都帝国大学で同時期に学生時代を過ごしている。大正12年度の「第三高等学校一覧」には理科1年甲類3組に小川(のち湯川)秀樹、理科1年乙類に朝永振一郎の名が見える。

⑤ 京都帝国大学一覧 (1897-1898) (附図 1-52/キ/15)

京大では創立翌年の明治31(1899)年から「一覧」の刊行が始まっている。「法学博士木下廣次寄贈本」とあり、寄贈者に初代総長の名前が記されている。



⑥ Memoires of the College of Science and Engineering, Kyoto Imperial University 京都帝國大學理工科大學紀要 (1903) (附図 BNC/M/64)

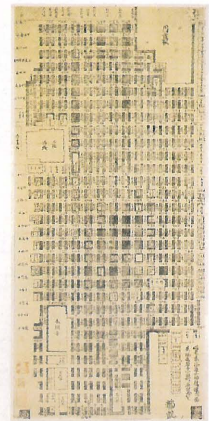
明治36(1903)年、京都帝国大学の初めての紀要である理工科大学紀要が刊行される。創刊号には久原躬弦(化学)、近重真澄(金相学)、村岡範為(物理学)、田丸卓郎(物理学)、水野敏之丞(物理学)、青柳栄司(電気工学)、松本均(工業化学)らが論文を掲載している。

会場2：附属図書館3階展示室

京都大学電子図書館と貴重資料のハイブリッド展示

① 都記（附図 大塚／江戸／1）（古地図コレクションから）

本図は、わが国現存最古の刊行町絵図で、洛中の街区の
みを黒く刷り出している。六条以北の室町と新町の間に「け
いせい町」が記されており、寛永18年(1641)の遊郭の島
原への移転以前の図とされる。さらに、「二条御城」に御
本丸の文字が未記入であることから、本丸天守閣の新造営
などの整備がなされた寛永元年(1624)から同3年の間の
刊行と推定されている。

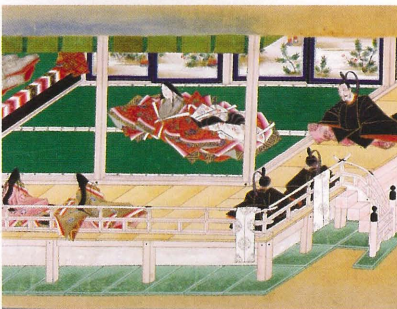


② 吉田松陰画像附松陰自賛（附図 尊／軸149／貴）（維新資料から）

安政の大獄が進行する中、萩の野山獄に入れられていた吉田松陰も、安政6年(1859)
5月に江戸へ護送されることとなった。そこで吉田松陰の門下生達は、同じ門下の画家松
浦松洞に師の肖像を描かせ、松陰の自賛をもとめた。二十一回猛士は吉田松陰の号、日
付の5月21(念一)日は、江戸護送の5日前である。

③ 付喪神（附図 8-4/ツ/2貴別）

室町時代の成立。古道具という非情物の成仏を描き、真言密教の
優性を説く。本書は近世の模本であるが、器物の妖怪という設定は『百
鬼夜行絵巻』にも通じる。



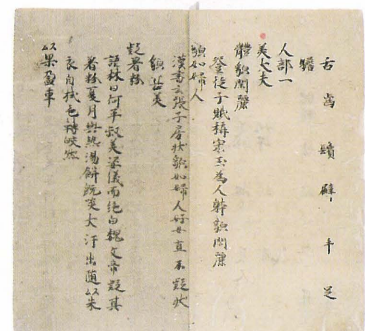
④ たま藻のまへ（附図 4-40/タ/1別貴）

近衛院の時代、鳥羽院の仙洞に一人の化女が現れた。美人で学識も高
く、化生の前と称された。詩歌管弦の遊びが催された折、身体から光を
放った化生の前は 以後玉藻の前と呼ばれる。彼女を寵愛する院が病に
伏し、典薬頭では治せず、高僧たちの祈祷も効かない。陰陽頭安部泰成
に占わせると玉藻の前の正体、那須野 に住む仏教に仇をなす天竺震旦

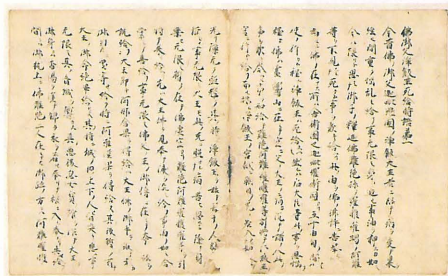
渡りの狐の仕業とわかる。太山府君祭の途中玉藻の前は姿を消す。弓の上手上総介と三浦介が那須野に下り、
鍛錬の甲斐あって狐を射殺す。都に運ばれた狐は宝蔵に納められ、その身体からは種々宝物が得られたという。

⑤ 幼学指南鈔（附図 4-85/ヨ/01貴）（重要文化財）

平安末期、中国の類書にならって邦人の手により編纂された和製類書。
本来は30巻に目録1巻を添えた全31冊であったと推測されるが、現在
では一部が失われ、残りは諸家に分蔵されている。



Copyright 2001, Kyoto University Library



Copyright 2002, Kyoto University Library

⑥ 今昔物語集(鈴鹿本) 鎌倉時代中期(写本)(国宝)

現存する今昔物語最古の写本である。現存写本は六十本を超えるが、一二の系統不明のものを除けば、すべて鈴鹿本が祖本とされている。「今(ハ)昔」で始まり、「トナム語り伝ヘタルコトヤ」で結ぶことを原則としていることから、個々の説話が独立した「今(ハ)昔(ノ)物語」であり、『今昔物語集』は、それを集成した作品という意味合をもつ。

⑦ La piazza di San Marco in Venezia (附図 YQ/11/Q1/ 準貴) (フランス建築・地誌コレクションから)

ヴェネチア生まれの経済学者アントニオ・クアドリ (Antonio Quadri, 1777-1845) による著作です。

経済や統計学関係の著作のほかヴェネチアの風物に関する著作も残しており、本書ではその中心地であるサン・マルコ広場について、ビザンチン様式の代表作といわれるサン・マルコ大聖堂、総督宮、時計塔、大鐘楼、旧図書館など周囲の歴史的建造物の美しい手彩色図版を添えて詳述しています。



Copyright 2000, Kyoto University Library



⑧ 天正遣欧使節肖像画 (附図 5-6/N/17 貴)

1586年にドイツのアウグスブルグで印刷された、天正遣欧使節の肖像画です。"Neue Zeytung auss der Insel Japonien" (日本島からのニュース) と題されたこの肖像画には、使節団のメンバー4人と案内兼通訳のメスキータ神父が描かれています。

⑨ Fauna Japonica (日本動物誌) (理学研究科・植物学教室図書室) (所蔵資料で見る博物学の時代から)

本書はシーボルト (Siebold, Philipp Franz Balthazar von, 1796-1866) が長崎に滞在した1823-1829年間に採集した膨大な動物標本や、川原慶賀などの日本人絵師が描いた下絵をもとに、ライデン博物館の3人の研究者によって作成され、1833年から1850年という長期にわたって5つの部篇が分冊刊行されました。

日本の動物について欧文で記載した最初の資料であり、本書によって日本の動物が西欧に広く紹介されました。



Copyright 2000, Kyoto University Library



Copyright 2000, Kyoto University Library

⑩ Flora Japonica (日本植物誌) (理学研究科・植物学教室図書室) (所蔵資料で見る博物学の時代から)

本書はシーボルト (Siebold, Philipp Franz Balthazar von, 1796-1866) が日本において収集した植物標本や、川原慶賀などの日本人絵師が描いた下絵をもとに作成され、1835年から1870年にかけて30分冊として刊行されました。

【協力者】

浅原 達郎 (京都大学人文科学研究所教授)
増田 富士雄 (京都大学理学研究科教授)
西山 伸 (京都大学大学文書館助教授)

2005年11月15日
編集・発行 京都大学図書館機構
〒606-8501 京都市左京区吉田本町36-1
<http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp>